

## 『ユリシーズ』（1～3挿話）解説

樋 口 日出雄

大方の意見によれば、『ユリシーズ』（第1部）の主人公・スティーブン・ディーダラスの幼児期については、作中には格別の記述がないということではば一致をみているようだ。しかし次の場面はどうか――

Old Father Ocean.

Prix de Paris: beware of imitations. Just you give it a fair trial. We enjoyed ourselves immensely. (Ulysses, III, P63)

ことに最後のふた言は父親のスティーブンに対する愛情あふれる育児ぶりを見せているとはいえまいか。Prix de Paris というのは幼児の好みに合う遊具と思われるが、筆者はこれは木馬ないし馬の形をしたシーソーの一種と考える。

ここをシナリオ風に改めて訳してみると――

[ナレーション] 老いた父なる海。

…中略…

[ディーダラス父] (息子に向かって木馬を示して)

思いきり乗り回してみな。

[ディーダラス父] (息子が夢中になっているのをみて)

さあさ、もう床につく時間だよ。

(We enjoyed ourselves immensely.)

となろう。最後の文の paternal “we” には息子に向けた父の愛情が、ひときわくっきりと表現されている。

さらにいえば、「思いきり乗り回してみな」と訳した <give it a fair trial> という表現をひとひねりした <give (a person) a fair shake> という表現は日本の辞書にあたれば <人を誠実に扱う (だまさない)> という意味のアメリカ英語であるという。この <trial> とは馬術競技用語にいう <試技> にあたる。<shake> にしても木馬をゆする行為を写しており、いずれにしても <馬> との関係を示している。

さて、ペンギン版テキストで1ページ前 (P. 62) に次の一節がある—

①Staunch friend, a brother soul: Wilde's love that dare not speak its name. ②He now will leave me. ③And the blame? ④As I am. As I am. ⑤All or not at all. (U. P. 62)

この個所に関しては、ペンギン版では(1)と(2)のあいだに当然あるべき <His arm. Cranly's arm.> という語句が抜けていることに注意を促しておきたい。その上でこのシーンは、私見によれば、馬上槍試合との結び付きを、作者と読者のあいだで合意の上のこととしなければ解釈不能であろう。私見では——

(1)は Staunch という文頭の単語を動詞とみることで、文意を通じさせることができるとする点が一点。

(4)は <as I am> という三つの単語の流れを <as/I am/> という二つの単位とし、I am=iamb (発音は同じ) とする点が一点。

——この意見にもとづいて試訳してみると、

(1)友を止血せよ、兄弟を。ずばりとはいわずとも、ワイルドが愛してやまぬもの。

---

[ クランリーの強肩。その腕っぶしの強さ。 ]

(2) 奴は去る者、おれは敗残の身。

(3) 奴のその時の口実は？

(4) 今のおれが弱強格 (iamb) であるから。弱強格であるから。

(5) ドンか、ドボンか。

——とでもなるうか。拙訳では(5)については<all>が強勢で<ドン>、<not at all>が弱勢で<ドボン>のつもりである。<not at all>のミーターが、弱強格を二連させたものであることを念頭におけば、最後の訳は「全てドボンだ」としても大禍あるまい。要は、かつての学友克蘭リーの的を射る手腕と、的を外すスティーブンのそれとが対照的に取りざたされているのであろう。

## II

前章の引用文を——

(1) 動詞から文に入る (Staunch friend, …)

+

(5) 名詞どめ (All or not at all.)

という風に公式化すると——

⑥ Parried again. ⑦ He fears the lancet of my art as I fear that of his.

⑧ The cold steelpen. (U. P. 6)

という第一挿話にみる表現についても、

(6) 動詞から文に入る

+

(8) 名詞どめ

となつて見事に公式にはまる。文学的トピックとしては<pen>があり、医学的トピックとしては<lancet>がある。しかし重大視すべきは、

<cold steel>が「刃物」という意味の成句であるからには、<lance>という馬上槍試合に不可欠のスティーン（文学的存在）やマリガン（医学的存在）をこえた文化論的トピックであろう。

ジョイスの立体的文体は文学トピックと医学トピックとをハイブリッドさせて、文化論的トピックを成立させている。スティーンとマリガンをハイブリッドさせて克蘭リーという人物を設定しているのである。ならばこの引用に続くこと数行にして

Cranly's arm. His arm. .... [問題点(1)]

という文言があるのをどう解釈すべきか。そのためには、この引用の少し前へさかのぼって――

His gaze brooded on his broadtoed boots, a buck's castoffs *nebeneinander*. He counted the creases of rucked leather wherein another's foot had nested warm. The foot that beat the ground in tripudium, foot I dislove. But you were delighted when Esther Osvalt's shoe went on you: girl I knew in Paris. *Tiens, quel petit pied!* Staunch friend, a brother soul: Wilde's love that dare not speak its name. He now will leave me. And the blame? As I am. As I am. All or not at all.

このパラグラフ全体から考察してみよう。ここも下二行目のところに

[His arm. Cranly's arm.]

という句があって、しかるのちにHe now…以下の文が続くことが、ジョイスの原稿通りであることを再確認しておくべきであろう。

景勝地ともいえないただの海岸に山となっている漂着物の中であって、ひときわ色どりを添えている物は各種の靴であるが、靴から連想は、スティーンが勤め先の学校で目にしたホッケー試合に移ること請負いである。<crease>は革ひもで作ったホッケーのゴールを指し<wherein another's foot had nested warm>の個所は、<相手チームの足（ガー

---

ド) がぬくぬく足ぶみしていた>とでも訳すところで、<the foot>はホッケーのガードを指し、<beat the ground=地を踏み鳴らす>のはその守備の固いありようを示す。したがって<foot I dislove>は「気にさわって仕様のないガード」を写すのに足りるものであろう。以上の私見から、問題点(1)に関して――

クランリーの強肩。その腕っぶしの強さ。

というホッケー／馬上槍試合がらみの訳文が成立するに足りると考えられる。これを補強すべく

Staunch friend, … (友を止血せよ)

以下の流血シーンをジョイスは用意したものといえよう。

### III

念押ししておく、前章にのべたことはこのシーンが海岸の靴を写した実写であるとの主張を退けるものではない。しかし――

He counted the creases…

以下の行文を「やつは革靴のシワを数えた」とするよりも「やつはゴールを割った」とした方が通りがいいものとする。

He went out by the open porch and down the gravel path under the trees, hearing the cries of voices and crack of sticks from the playfield.

(U. P. 44)

この主語の<He>はスティーブンであることは動かないが、そうであれば先のゴールを割った<He>が、等しくスティーブンの役回りであっても不思議はない。

「老いたりとはいえ」と校長のディジーはスティーブンに向かっていう。「君と一戦交えたいものです」。

(I like to break a lance with you…)

そのディジー校長の教え子で体育に難がある学童を目して、スティーブンは

Like him was I, these sloping shoulders, this gracelessness. My childhood bends beside me. Too far for me to lay a hand there once or lightly. Mine is far and his secret as our eyes. (U. P. 34)

——と一人で合点しているようである。ここの訳として

似たようなものだった。おれも撫で肩でかっこ悪いたらなかった。おれが幼年時代にふるった槍は手もとで曲がってしまう。相手の急所をつこうにも、一つき軽打でもよいのだが、距離がある。おれの槍は届かない、この子の槍は相手の動きについてゆく目のようになぞの動きをする。

——のようになると荒唐に過ぎようか。

<Mine is far…>で始まる一文についてもあえてここに私見を提出したい。一方で

Mine=my secret [河出書房新社版、柳瀬尚紀訳]

という説明があり、他方に

Mine=my childhood

[集英社版、丸谷才一／永川玲二／高松雄一共訳]

という説明があるが、双方ともに misleading であろう。ここは

My lance is far, and his [his lance] (is) secret as our eyes.

とするのが私見である。したがって<our eyes>の<our>には馬上槍

---

試合（またはホッケー試合）に参加している者たちという含意があろう。

この引用にある〈secret〉が名詞であるにせよ形容詞であるにせよ、次の引用の〈secrets〉は、この学童の母親が衆人の目からこの子の産着<sup>うぶぎ</sup>を隠したことに関係があるというべきであろう。

Secrets, silent, stony sit in the dark palaces of both our hearts:  
secrets weary of their tyranny: tyrants willing to be dethroned.

（私訳）

秘密の産着が我々の心の奥の院に、台石みたいに預けてある。暴虐に音をあげた産着が。平気で城さえすてる悪大名級の襦袢<sup>むつぎ</sup>が。

スティーブンと学童とのあいだにみる類縁が、二人の心の奥の院にあることから、容易に推察されるところである。その秘密の産着は、転じて秘密の馬上槍試合の槍に通じていよう。

#### IV

この学童がサージャントと名指しされ父姓を拒否されているという事実は、我々の考察を深める手だてを与えてくれるだろう。父姓／父性を求める男性主人公は、スティーブンもそうだが特定の男性の前で何か尻の座りが悪いところがある。赤子の時分に産着を隠されたという体験は自分の尻のもって行きようの悪さに通じている。

そうすると〈The foot I dislove〉というフレーズも、リアリズムの勝った描写そのもので通るのかもしれない。自分でも踏む足場もないのを知っているながら、槍試合やホッケーの場での混戦状態で自分も無理につきせすには納まらないという足捌きにも通じていよう。

スティーブンは第三挿話において海岸に出て自分の「貧弱な姿」(the graceless form) をひときわ目立たせているのであるから、この遊歩者は

楽しむという態度を欠いている。

こうして<graceless>という単語はおおよそ<fatherless>という単語と交換可能となる。<graceless form>こそは世間の目から父を隠し(fatherless)通そうとした母の秘蔵の産着でもあったろう。産着が<swaddling bands>といつも複数形であることも手伝って、この代物は乳をもらう幼児からみると、手かせ足かせと映るであろう。つまり産着とは名ばかりで、母体と幼児の手足とをたすきがけのようにつなぐ連結具であることはまず動くまい。尻の座りの悪さはもともとの連結具の不安定と通じているのである。

<the foot I dislove>もこの連結具からはみ出している見た目にも悪印象をあたえる足である可能性も出てくる。<secrets weary of their tyranny>という句を目して、手足を締めつける圧制に少々嫌気がさしている産着／連結具とする解釈も、大きく的を外すことにはなるまい。

スポーツ用具と母と子を結ぶ連結具と——知／情、剛／柔、武張ったこと／世帯じみたこと、など自由に変奏できるテーマ系は、読むほどに読者をうつむき気味にしてゆくであろう。連結具といえば陣痛時に母が頭に巻く酢をしみこませたハンカチのことを、第八挿話でブルームが想起している——

Sss. Dth, dth, dth! Three days imagine groaning on a bed with a vinegared handkerchief round her forehead, her belly swollen out! Phew! Dreadful simply! (U. P.204.)

これらの<hands>や<handkerchief>は——

A good layer. Old woman that lived in a shoe she had so many children. (U. P. 204)

という文句にもある如く、わずかの資金(in a shoe)で、難しい経営をする(had so many children)ための絆というべきであろう。



---

<the foot I dislove>という句は、ここに至ってスポーツ時のありようを脱して、わずかの資金のため苦慮するディーダラス家の家計事情にも通じている。読むほどにうつむき気味になると規定したジョイスの文とは一

poverty>shoe>foot

という不等式が成立するように構成されているからであろう。つい別の成句

the shoe is on the other foot (話は逆に進んでよ)  
を思い起こしてしまうのは筆者だけであろうか。

## V

先にふれた<武張ったもの／世帯じみたもの>というテーマ系に関しては

Cranly/a good layer

という実例を出すだけで足りよう。クランリーについては、すでに引用リストに加えて考察してきた。ここでは第九挿話にある一句だけを掲げておこう。

Cranly, I his mute orderly, following battles from afar.

(クランリー、おれは足音を忍ばせるやつの衛生兵だ。遠く離れて戦闘についてゆく。) (U. P. 240)

注釈を加えておけば、<battle>は馬上槍試合を指すと思われる。  
<from afar>は

Mine [ my lance ] is far

の背景を説明するであろう。しかしジョイスは〈Cranly's arm〉としか書けなかった。書けなかったのであろう。手に〈lance〉をもつこと、それは克蘭リーにすれば自分の秘密の技を人に伝えることで、スティーブンはまだその技を盗んでいないのである。

〈足音を忍ばせる〉〈衛生兵〉についていえば、〈友を止血せよ…〉以下の引用を思い起こすべきであろう。〈follow battles〉を〈follow battues〉と解釈すれば猟において狩出し隊にお伴することであり、克蘭リーという馬上の友にかしずき、猟犬のように足音を忍ばせて遠方から助勢する役であろう。こうして〈武張ったもの〉というテーマが〈武張ったもの／世帯じみたもの〉＝〈狩猟／a good layer〉（子沢山の母どり）というテーマ系に接続される。

そういえばパリ時代のスティーブンを写した――

You seem to have enjoyed yourself. (U. P. 51)

にみる〈seem〉は警察側の「今すぐにくわしく調べるひまがないが…」という含みである。〈have enjoyed yourself〉は〈a good layer〉のもとから脱れたひな鳥が勝手に余所のテリトリーを犯すので、少しばかり制裁をちらつかせる文句で、〈もう警察の調書に色をつけてもらわないと…〉つまり〈十分黙秘を続けたらろう。だから……〉という内容。

ジョイスの筆が、再びたび克蘭リーの主題をとりあげる場合は、決まって〈a good layer〉とのかかわりの中においてである。タゲリ(lapwing)という鳥がスティーブンの分身として作中に拉致されるのはこの時である。

Lapwing.

Where is your brother? Apothecaries' hall. My whetstone. Him, then Cranly, Mulligan: now these. Speech, speech. But act. Act speech. They mock to try you. Act. Be acted on. (U. P. 271)

タゲリは卵のカラを頭にのせたままで動き回るので、少々頭でっかちに

---

理屈を振り回すスティーブンに適応すると考えたのであろう。〈lapwing〉とは〈lap=折りたたむ〉+〈wing=つばさ〉であり、次に用意される「薬剤師会」(Apothecaries' hall) や「砥石」(whetstone) とあいまって、骨をくだいて砥石にかけて薬を調合する古い製薬法をイメージの内で経過しながら、風切り羽を刃物のように研ぎすまして、砥石のもとから意のままに空中に飛翔してゆく様が描かれる。

第三挿話の言葉をかりると、クランリーとマリガンは「同時に並列して」いるのであろうか。これから先は別の主題となる。本論はクランリーをめぐる長い回り道をしたということになるだろうか。